2022「大学生の力を活用した集落復興支援事業」実証活動報告書

福島県磐梯町大寺五区の活性化

「極そばプロジェクト」

2023 年 2 月

駒沢女子大学エノモトスタジオ

目次

１：エノモトスタジオの紹介

～１年目調査活動～
２：「磐梯町」の歴史

３：大寺五区について

４：極そばプロジェクト～農地再生事業～

５：今年度の具体的な活動

６：今後の展開、流れ ～発展的な継続と他の耕作放棄地への対策を考える。～

～１年目を踏まえ、２年目実証活動～
７：今年度実施した取り組みの内容

８：実証結果・まとめ

９：今後の展開

１０：感想

１：エノモトスタジオの紹介

駒沢女子大学人間総合学群住空間デザイン学類・エノモトスタジオ
私たちは、駒沢女子大学人間総合学群住空間デザイン学類エノモトスタジオに所属している。
環境や自然に興味がある学生が多く在籍しており、普段は木を使って家具を始め生活に関する様々なアイテムのデザインや制作を行っている。
一年目の調査活動に続き、指導教員である榎本教授と親交のあった福島県磐梯町の方の提案で始まった活動に２年目としてこの活動内容に関心を持った５名が取り組んだ。
しかし、１年目は２０１９年度に取り組み今回は２０２２年度と期間が空いたため、メンバーは全員が今回初めての参加となった。

２：「磐梯町」の歴史

・807 年法相宗の僧徳一が「慧日寺」を建立。
平安時代には隆盛を極め、大寺地区は慧日寺の門前町であった。慧日寺の寺社群は 1589 年の伊達政宗の会津侵攻により焼失。
・江戸時代には会津藩領となり、会津若松（会津藩）と二本松（二本松藩）を結ぶ二本松街道・下街道の宿場町「大寺宿」として栄えた。
・大正以降、水力発電所や金属精錬工場（日曹金属化学）が建設され、昭和 30 年頃、町の人口は８千人近くいたが、発電所の無人化や工場の合理化により、人口は減少の一途をたどった。
・大寺五区地区は多くの旅籠や商家が軒を並べ、本陣（大名の宿泊所）が置かれていた大寺宿の中心部であったが、人口の減少と共に衰退し、今では数件の商店が残るばかりである。
・平成５年にアルツ磐梯スキー場がオープン。町内には(株)シグマ、日曹金属化学(株)の工場があり、大きな雇用を創出している。

（地図は磐梯町ふるさと納税パンフレットより）

表２　平成27年国勢調査における夜間人口。昼間人口

夜間人口	昼間人口	流出人口	流入人口
3,579	4,512	919	1,852

※流出人口は、磐梯町から他地域へ通勤通学している人口
※流入人口は、他地域から磐梯町へ通勤通学している人口

３：大寺五区について

かつて、町内には多くの青年会組織が存在し、地区行事や祭礼など様々な活動を行っていたが、人口の減少とともにその姿を消していった。
大寺五区青年会は、地域の若者のコミュニティの復活をめざし、昭和 61 年４月に発足し、旅行やキャンプ、歳の神など地区の行事を行っていた。
人口の減少と少子高齢化が進み、多くの地域が活力を失っていくなか、大寺五区青年会のメンバーも高齢化も進んでいるが、「自分たちの地域は自分たちで楽しくしよう！」という、自然発生的な活動方針により、様々な活動に取り組んでいる。

・大寺五区青年会：会員数 15 名（うち女性３名）
年齢層 32~62 歳（30 代１人、40 代４人、50 代７人、60 代３人）平均年齢 51.4 歳

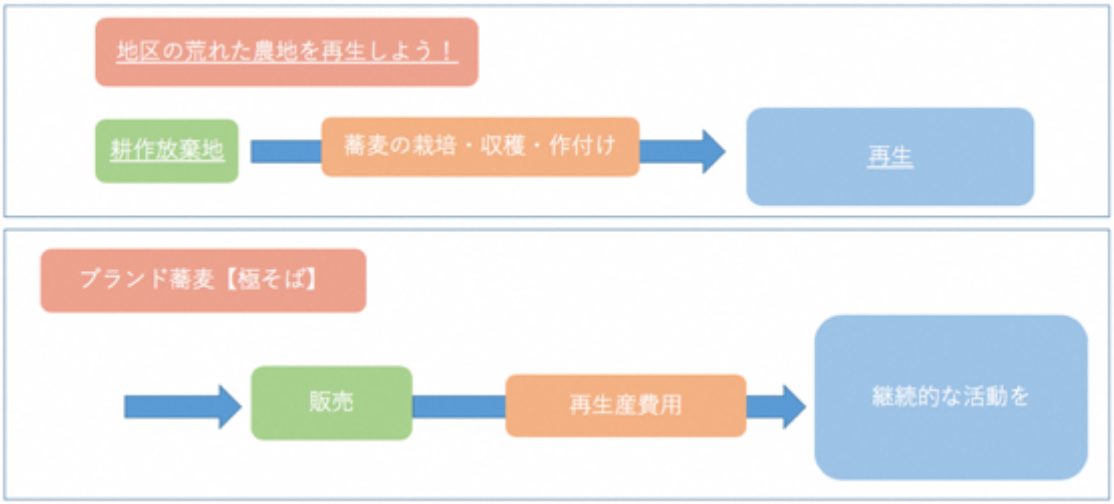
表１　人口の推移

時点	町の人口	大寺五区	
		人口	世帯数
S30年1月	7,845	394	85
S50年1月	4,906	281	72
H10年1月	4,385	187	60
H30年1月	3,529	146	60
R元年7月	3,460	137	53

・耕作放棄地について
大寺五区は世帯数に対する農業者が少なく、古い地図を見ると地区の中心である街道沿いは、商店が立ち並んでいることから、大寺五区はもともと農業より商工業が盛んな地区であったと思われる。作付けされていない農地は、所有者が草刈りを行い荒れないよう管理をしていたが、点在する小規模な農地は長年耕作もされず荒れた状態となっていた。

４：極そばプロジェクト～耕作放棄地再生事業～

我々の活動「極そばプロジェクト」について説明する。
極そばプロジェクトは、近年町内に多く存在する耕作放棄地を利用し「地区の荒れた農地を再生しよう」という思いから始まった。
青年会会長が打った蕎麦が青年会のメンバーや地域の方々から好評だったことで、「自分たちでそばを栽培して、もっと美味しいおそばを食べよう」と考えた。
地域の方から無償で農地を借り受け、青年会で蕎麦を栽培・収穫し、そしてその種を使ってまた来年作付けするという農業生産の循環と「大寺五区の蕎麦」のブランド化を目指し、「五区」と「極上のそばつくり」の「極」を掛け合わせて、「極そばプロジェクト」と命名された。
そのプロジェクトの実現のために、若い力、発想力を借りてできないかというお話をいただき、今回の合同プロジェクトが実現した。
今まで収穫したそばは、プロジェクトメンバーで食べることで終わってしまったが、将来的には、収穫量を増やし、外部に販売することを目指し、再生産のための費用を生み出して継続性のあるものにしたいと考えている。



・極そばプロジェクトの対象農地
多く存在する地区内の耕作放棄地の中で、今回は大寺五区の３か所の耕作放棄地をお借りした。
この３つのエリアは、場所が悪く面積も小さいため、大きな機械が使えないため手間が掛かるという理由や、所有者が高齢のため農作業ができなくなったため耕作放棄地になっていた。

No.	地名	地目	面積
1	滝下（たきした）	田	442㎡
2	鬼越（おにごえ）	畑	210㎡
3	四十房（しずぼう）	畑	1,943㎡
計			2,595㎡

5：2019 年度の活動

■種まき

1 ：滝下エリア

・畑の雑草取り。

・その後、耕耘機を入れ耕し終わった土に混ざっている萱の根っこを取り除く作業。

・肥料とそばの種を蒔く。

▼最初の畑の状態

▼根っこを取り除く作業

▼肥料・種まき

▼周りの雑草を寄せ集める作業

▼蒔いた肥料と種

2 ：鬼越エリア

・畑の雑草取り。

・その後、耕耘機を入れ耕し終わった土に混ざっている萱の根っこを取り除く作業。
鬼越エリアでは畑の草刈りも草刈機の操作を教わりながら自分たちで作業した。

・肥料とそばの種を蒔く。

▼最初の畑の状態

▼畑の周りの草刈り

▼肥料・種まき

▼耕した後の畑

▼草刈り機をそうしての作業

▼肥料・種まき

３：四十房エリア

・三箇所の畑の中でここが一番広く、ここは農協に委託して機械で草刈りと種蒔きを行った。

■刈り入れ

・滝下エリア

滝下エリアは明らかに生育不良であり、改めて環境の悪さを実感した。一部の茎が倒れてしまっていたため、ひとつひとつ手で実だけを採るという作業を行った。

生育不良の原因として、周囲を住宅に囲まれ風通しが悪く、またむかし水田として使われていたため両側にコンクリートの水路が流れていて非常に水はけが悪い、などが考えられる。

今後も畑として使用していくのであれば専門的な知識の元、改善が必要だと感じた。

・鬼越エリア

鬼越エリアは日当たりも土の状態もよく、しっかり育っていた。滝下と鬼越の２つの畑併せて約20kg ほどのそばが収穫できた。

・四十房エリア

敷地が広く、スケジュールの問題もあり、種まきも刈り入れも農協に委託して機械で行った。敷地の広さや土の状態が良かったため、一番多い 113kg の収穫量だった。

■地域の人々との交流

今回の活動では、大寺五区の青年会にみなさんを始め磐梯町町長や役場の方々など多くの方々と交流し、またお世話になった。

６：今後の展開、流れ ～発展的な継続と他の耕作放棄地への対策を考える。～

■活動規模の拡大：

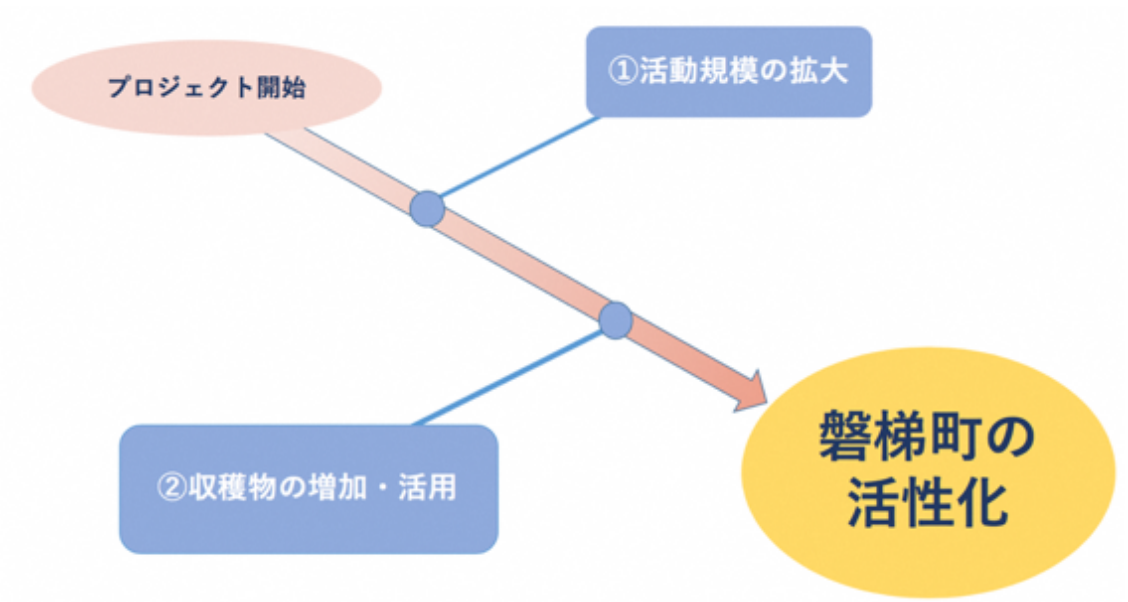
今後は下級生や他学科にも参加を募って、継続的かつより規模の大きな活動にしていきたい。

■収穫量の増加とその活用：

収穫量の増加については、環境条件の悪さが顕著に見られた滝下の土地をどう活用し収穫量を増やすかが今後の課題である。活用については、収穫したそばの商品化を視野に入れている。

■磐梯町の活性化：

大寺五区では地域の学校と連携した取り組み、また駒沢女子大学では他学科との連携による商品開発など、若者に関心を持ってもらえるような活動にしていきたい。そのために、耕作放棄地の再生を通した磐梯町の活性化に繋がるように今後もこの活動を継続していきたい。



～１年目を踏まえ、２年目の実証活動～
７：2022 度実施した取り組みの内容

① オンライン会議

4 月頃に実施し、地域の方と交流と地区の持つ歴史や特徴など地域を知る時間を設けた。

② 種まき作業

※8－9 月頃コロナの影響により大学の方針で現地に赴くことができず、青年会が行なった。

③ 地域の環境調査

10 月末に現地に赴き、耕作放棄地など視察し地区の集会所を訪れどのような行事やイベントなどを行なってきたかを伺った。

④ そばの実の収穫作業

a.　刈り入れ　b.脱穀　c.天日干し　d.袋詰め　の四つの作業を地元の方と行った。

写真（左）刈り入れ前（右）刈り入れ後

写真（左）刈り入れ（中）脱穀（右）刈り入れ後

写真（左）天日干し（左から２番目）ゴミ取り（左から３番目）袋詰め（右）収穫したそばの実の入った袋

⑤ そばを使った商品研究

今回は、収穫したそばを使った新な商品展開することを目的に、事前に様々なアイデアを出し、事前にメールを使い磐梯町と調整しながら２月 11 日の報告会後に地区を訪れ、実際に生産したそば粉を調理（試作）を行った。

調理したものは、そば団子・ドーナッツ・ガレット。茹でる・揚げる・焼くの様々な方法でそば粉を調理した。地元の方達と作ったものを試食し、意見交換を行った。

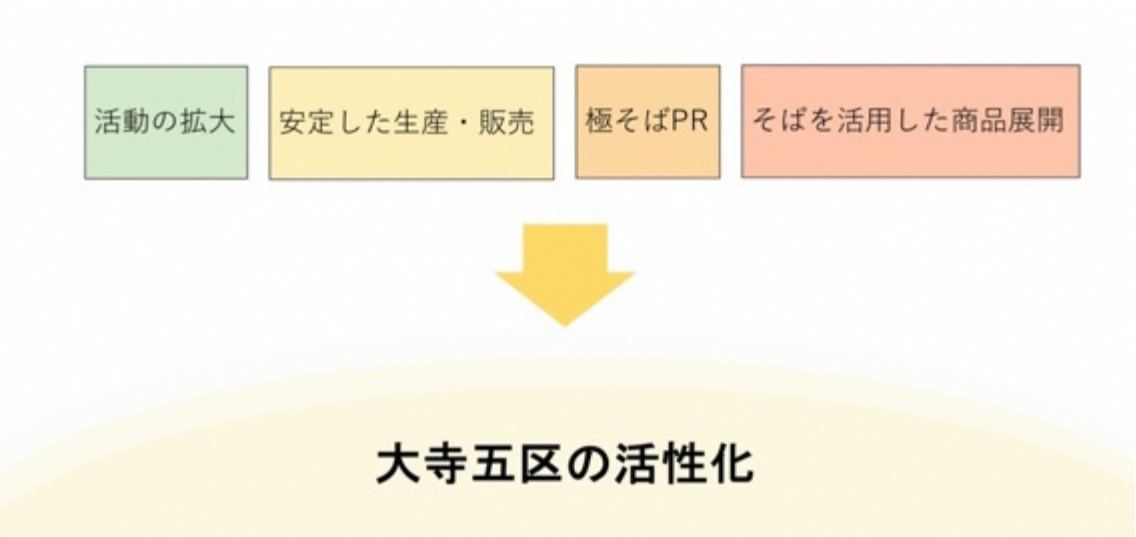
調理風景

写真（左）そば団子　（中）そばドーナツ　（右）ガレット

意見交換会（地元の方がうったそばが振る舞われた）

８：実証結果と今後に向けて

今回、そばを使った新たな商品３種類の試作を行った結果、どの商品も非常に好評であった。今後は、販売の形態や販売の際のパッケージ、値段、などを検討し、道の駅などでの販売の可能性を探っていきたい。



２０２３年２月 11 日 活動報告会

９：活動に対する感想

・ＫＳ（4 年）

青年会の方たちが全体を通してサポートをしてくださり、町内の見学・作業（刈り入れ・脱穀・天日干し・ごみ取り）をしました。鎌でそばを刈り、手で穂とそばの実にわけ、天日干しされているそばの実の中に混ざったごみ（茎・他の実・石など）を手と機械でそばの実だけになるようにして袋詰めをすることができました。普段の生活では経験することができないことを経験でき、一つひとつの作業がとても楽しかったです。そして、人と協力し作業を行う中で、会話や助け合いなどが自然と生まれとても充実した時間になりました。

報告会に参加し様々な大学と地域が地域の特徴を活かした活動を行なっていることがわかりました。大学生・地域の方が互いに刺激をうける良い機会を持てた感じることができました。そして地元の方と収穫したそば粉を使った料理を作り食べるという機会は貴重な時間で人の優しさを多く感じることができました。

・ＷＩ（3 年）

今回の福島での活動は私にとって貴重な経験となりました。まず作業前に周辺の散策をしました。所々に見られる空き地を少しずつ手作業で整備し活用しており、今回の体験もその一環として関われていることが実感できました。また、地域でのイベント時の写真や町を歩いた時の近所の人同士の密接なつながりは居心地がよく、印象的でした。体験では収穫して実を取り、乾燥、脱穀、袋詰めを行いました。どの工程も単純な作業でありながら決して楽なものではなく、作業終了時には大きな達成感を感じることができました。

復興活動の報告会は、グッズ制作やイベント開催など各学校が関わった、町に合った活性化が印象的でした。また、前回の続きとして私達は収穫したそば粉を使用し調理しました。和洋関係なく幅広い料理ができました。その後の食事会では町の方同士の長く濃い付き合いの魅力や町への愛着を感じました。学びのある大きな経験になりました、ありがとうございました。

・ＲＯ（3 年）

私は、今回の活動はそんなに大変ではないと思っていましたが、いざやってみるとさまざまな工程があって想像以上に疲れました。刈る作業や手作業でごみを取り除く作業では、腰を曲げていたのでとてもハードでした。刈る作業は稲刈りと同じ要領だったので簡単でしたが、ごみを取り除く作業は粉塵が舞ってごみだらけになったり、虫の死骸を触ってしまったりでとても大変でした。しかし、磐梯町の青年会の方たちはとてもアットホームな雰囲気で、私たちにもとても親切に接してくださり、心地よく作業することができました。自分たちが収穫したそばの実でそばを打てるのが楽しみです。

実は蕎麦はどちらかというとあまり好きではない方でしたが、この極そばを食べてみて今まで食べた蕎麦とは比べ物にならないくらい美味しくて、初めて食べた福島の郷土料理もそば粉を使った料理も想像の何倍も美味しくて本当に驚きました。食事会も普段は話す機会のない年代の方たちと交流できてとても楽しい時間を過ごせました。

・ＴＳ（３年）
今回の活動では、蕎麦の刈り取り作業をお手伝いさせていただきました。その後は、そば粗選機で落ち葉などのゴミを取り除き、袋に詰めて作業を終えました。一日があっという間に感じたほど大変な作業でしたが、お話を聞いたり、作業について教えていただいたりと楽しく作業しました。福島を訪れたのは今回が初めてで、活動外でも福島について学べたことがたくさんあり、とても充実した時間を過ごすことができました。二月の報告会では、今回収穫した蕎麦を打って味わえるとのことで、今からとても楽しみです。
今回の活動では、報告会、蕎麦粉を使ったレシピの検討兼食事会を行いました。
報告会では、他大学ではどのような活動をしたのかを見学し、自分達の活動の他にも様々なボランティアの方法があることを知ることができました。
レシピの検討会では、蕎麦粉を使った料理を作り、その後の食事会で味わいました。
食事会では、作った料理の他にも、福島の郷土料理である豆数の子、いかにんじん、馬刺しを頂きました。青年会の方々のお話を聞き、ボランティア活動の大切さを知りました。
今回の活動で福島県に足を運び、交流の素晴らしさ、現地へ訪れることの重要さを改めて感じることができました。

・Ｍ Ｔ（３年）
いつもお店で売られているそばがどのように実って、収穫され、食べられるように加工をされているのか、活動の前はあまり意識することはありませんでしたが、今回実際に自分たちの手で収穫し脱穀、袋詰めの工程を体験することができ、ほんの一部でも知ること、体験できたことで、日常で自分が使っているもの、食べているものが必ず誰かが手をかけて作ってくれていることを意識するようになりました。青年会の皆さんがとても暖かく接していただいたおかげもあり、とても有意義な体験となりました。
今回の活動では秋に私たちが刈り取ったそばを使い、新しい商品開発に向けた試作を行いました。実際に試作したもので特に良かったものはそば粉を使ったガレットです。必要な材料や道具が一般的なものであること、比較的手軽に作ることができること、見た目が華やかなことが良いと感じました。

・指導教員からの感想
2019 年度の調査活動から始まり、コロナ禍による 2 年間のブランクを挟みながら 2022 年度実証活動を無事終えることができた。
前回と今回で参加した学生は異なるが、私のスタジオの学生延べ 11 名が参加し磐梯町大寺五区青年会のみなさんと一緒になって耕作放棄地をそば畑に替え、地域の新たな名産とし、また地区の方々との交流と活性化のきっかけとする、という目的はある程度実施できたのではないかと考えている。
2 度の現地活動で、学生たちは初めての農作業やそば打ちなど様々な体験をし、また磐梯町の青年会のみなさんとの交流を通して新たな出会いを経験したことと思う。
本学の学生に限らずこの事業に参加した大学生はみな同じだと思うが、今の学生たちは 3 年次から始まる就職活動において授業以外でどのようなことに力を入れてきたか、所謂「ガク

チカ」を問われることになるが、このような事業に参加して実際に様々な体験をすることは、ガクチカを語る上で非常に有効な経験であろうと思われる。
その意味で、このような事業は福島県にとってもそれぞれの活動地域の人々にとっても、学生たちにとってもウインウインの事業である、と言えるかもしれないと思いつつ、だが少々疑問も感じている。

この事業は、国からの「福島特定原子力施設地域振興交付金」を使った県からの「委託事業」でありながら、受託者側(学生)には具体的な活動計画や予算提出は求められないまま、一方的に県が算出した委託料で受託するしかなく、具体的な活動では学生の現地 1 回と報告会の交通費と宿泊くらいしか賄えず、指導教員の引率が条件であるにも関わらずその経費も出せず、結局学生や集落への負担が発生することになる。
その一方、具体的な事業運営は外部業者に委託し、報告会では民間ホテルで行われ、知事との写真撮影など体裁を整えることには潤沢に予算が使われたようである。
まさに国の交付金使途のアリバイつくりに学生たちの善意が利用された気持ちになる典型的なお役所仕事と言えるのではないか。今の時代、報告会などオンラインで行えば経費も掛からず、その経費を実質的な活動費に回してもらう方がよほど良い活動ができるであろう。

契約についても学生たちにもっと自由に参加して活動してもらう為には、県が使用している一般的な業務委託契約書の流用で縛るのではなく、簡便な助成金や補助金というかたちで柔軟な対応を考えて戴きたい。この交付金は 30 年間継続するそうだが、その使い方には県民も学生たちもそして何より納税者である国民が納得できるような有効な使い方をして戴きたいと切に願う。

・磐梯町大寺五区 青年会会長

わが大寺五区青年会は昭和 61 年に発足してから地区行事や住民同士の懇親を深める活動を主に行ってきた。発足当時からのオリジナルメンバーは 60 歳を超え、もはや老人会であるが誰も脱退することなく、移住者や代替わりメンバーも参加し活動を継続してきた。
しかし、東日本大震災・福島第一原発事故後、青年会の活動は変化した。未曽有の大災害を経験し、それまで気恥ずかしかった「誰かのために何かしよう」という言葉を発せるようになり、地区で増加する高齢者宅の除雪や、鳥獣害の原因となる耕作放棄地を再生して蕎麦を栽培するなど、青年会メンバーが自分の休みを使って身銭を切り、やたら書類を要求される行政からの補助など一切受けず、地味で地道な活動を行うようになった。
しかし、メンバーも平均年齢が 50 歳を超え「俺たちはボケらんねーぞ！誰も面倒みてくんねーからな！」などど冗談を飛ばしつつも、それが確実に現実化することは誰もが理解していた。正直この地区には将来がないのである。
地区住民の方が保有している耕作放棄地を開墾して、蕎麦を栽培し、自分たちや地区の方々に美味しく食べてもらう「極そばプロジェクト（五区と極をかけたゴロ合わせ）」。メンバー全員賛成で何も考えず軽くスタートしたが、農業経験者はわずか 1 名、正直どこまでできるか五里霧中であった。そんな中、メンバーの一人が「大学生が応援に来てくれるかもしれない」

という話を持ってきた。わが青年会は何も考えず、なんでも受け入れるという素晴らしい特性を持っているので、二つ返事で話が決まった。

大学生との協働事業は、2019 年度、コロナ禍の 2 年を挟んで 2022 年度に活動が行われた。移動が制限されていた時期はオンライン交流も行ったが、学生たちが現地に足を運び、その目で現実を見、その肌で地区の雰囲気を感じ取ってもらえたこと、何よりも我々のような「変なおじさん、おばさん」たちと交流していただけたことが最高の成果であったと感じる。極そばのブランド化という事業目的は、あまりに期間が短く、コロナ禍による断続実施であったため、提案レベルにとどまると思うが、よそ者・若者が辺ぴな田舎にリアルに関わってくれることが、地域にどれだけのエネルギーをもたらすものか、まさにこの身をもって経験した。

事業の締めくくり、学生たちとの交流会の席上、あまり真面目な話をしない青年会メンバーが、この活動を通して自分がどう変わったか、どれだけ元気付けられたか、全員が自分の言葉で切々と語ったことは正直驚きであった。会長である私自身もメンバーにつられて柄にもなく将来ある若者たちへの熱い思いを語ってしまったほどだ。

国の無駄な事業をひとつふたつ減らしてでも、このような素晴らしい事業（名称はコロコロ変わるようなので事業と言う）が将来にわたり継続され、多くの若者たちが多くの地域と交流を持ち、己の人生の糧となる体験をしながらも、その地域にエネルギーをもたらし続けることを心から期待する。

我々の地区が、このような素晴らしい事業に採択されたことを関係各位に感謝するとともに、学生たちに最大の「ありがとう」と「エール」を贈りたい。